

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 法学研究科 法学政治学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	法学研究科法学政治学専攻 博士後期課程1年	乙幡翔太郎 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	法学部・教授	川崎 修 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	エドモンド・バークにおける「先入見」について-インド問題を中心に-		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2012年度		
研究経費	200千円(実績額又は執行額)		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、18世紀後期のイギリスの思想家であり、政治家であるエドモンド・バーク(Edmund Burke, 1729-1797)における「名誉」(honor)と「先入見」(prejudice)両概念の内容分析および、関係性についての研究である。

バークは「名誉」の基盤はを「先入見」であるとした。これは一見するとニヒリスティックな表現のようだが、バークは両概念を善き統治を行うために必要不可欠なものとして高く評価している。本研究では「名誉の基盤たる先入見」という表現に注目し、とくにインド問題に関わる言説のなかでこの問題を扱う。バークは「名誉」を統治者へ民衆から与えられる「報酬」と捉えていた。この報酬としての「名誉」概念に「先入見」がいかに関わるのかを分析していく。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[エドモンド・バーク] [先入見] [インド問題]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は 2012 年度修士学位論文「名誉の基盤たる先入見—エドモンド・バークにおける名誉と先入見の関係について—」に結実した。そのため、以下では修士論文の概要を説明していく。

修士論文において、エドモンド・バーク(Edmund Burke, 1729-1797)の「先入見」という概念の内容を明らかにし、さらにこの「先入見」を「名誉」という概念との関係を見ていった。その結果、この2つの概念が宗教に基づく伝統的階級社会と結びつくことで「恣意的権力」の抑制に寄与しているかを明らかにした。

バークにとって「名誉」とは、第1章で触れたように、統治者が徳を発揮して執政を行ったことへの民衆からの「報酬」と位置づけられていた。「名誉」を得られない統治者は臣民の不満が叛乱へと向かうのを常に恐れねばならず、統治者は恐怖によって臣民を統べるようになる。ここにおいて統治者は「暴君」に成り果てる。つまり「名誉」は暴政を抑制するものとして取り扱われている。つまり、「名誉」を得られない統治者は統治者としての資格を有しない単なる暴君として評価されるのである。

統治者の正当性の根拠たる「名誉」の基盤を、バークは「先入見」と表現したのである。これは一種のニヒリスティックな表現のように思えるが、そうではない。第2章でふれたように「先入見」とはまず、宗教に基づく社会規範であると表現されていた。民衆の間で古来抱かれている宗教、そしてその宗教に根差した社会規範をして「先入見」とバークは表現しているのである。バークにおいて特徴的なのは、そのような宗教的社会規範としての「先入見」を当時、野蛮で停滞した社会の典型として描かれたインドに見出したことである。ここからインドになぜ名誉の基盤を見出しえたのか、という疑問がわいてくる。バークは同時代の多くの知識人と違い、インドをヨーロッパに匹敵するほどの社会と貴族政を有していると、高く評価する。法の支配はインドにおいて、ヨーロッパを超えるほどに発展し、理想的な階級秩序、身分社会がインドには存在しているのだとして、バークはインド社会を高く評価するのである。つまりインドのカースト制をヨーロッパの身分にあてはめて考え、同列かそれ以上のものと評価しているのである。なぜ、このような評価が可能であったのか。それはバークが古来の宗教に基づく社会をどう評価しているかに関係している。バークは、古来の宗教に基づく社会を成り立たせているものを「先入見」と表現していると、先に述べた。そして、伝統社会としての「先入見」が統治者の正当性である「名誉」の基盤となることわけであるから、インドの古来のヒンドゥー教に基づく階級社会、カースト制も同様に、バークは理解しているのではないだろうか。これは、バークがカースト制を「先入見」と表現し、その安定性を高く評価していることから十分言いえることである。以上のように、バークが階級的秩序のある理想的な身分社会をインドに見出し、カースト制を「先入見」と表現していることが明らかになったことを第3章ではふれた。

以上2章にまたがる考察から、バークにおいて「先入見」は土着の宗教に基づく社会規範を示し、さらにこの社会規範と結びついた伝統的階級社会を意味しているということが明らかになった。伝統的階級社会として表現された「先入見」が「名誉」の基盤足りえるのは、まさに諸階級が統治者を正当かどうか判断するさいの基盤を提供しているからである。つまり、バークは、何が名誉に値するかの基盤が統治者と民衆の間で共有されていることが統治にとって重要であると考えていたのである。

諸階級が自らにとって「名誉」とはなにか、ということの基準をもつことで自由を確保し、統治者の暴政を抑制するという考え方はモンテスキューのそれに近い。バークは暴政の抑制原理として、モンテスキュー的な、つまり諸階級が「名誉」の基準を自律的に適用することで、暴政が抑制されるというような原理を採用している。しかし、バークにおいては統治者と民衆の間で、名誉の基盤が客観的に共有されていることが統治の安定にとって重要であると考えたのである。ここにバーク政治思想の独自性を見出すことができる。

以上が修士論文の要旨である。

研究成果の概要 つづき

以下では本研究自体の独自性を述べていく。

本研究の独自性は、2 点ある。第 1 に、バーク研究史上では重要な概念として、長い研究の蓄積がある「名誉」と「先入見」両概念を関係しているものとして取り扱ったことである。これまで、バークの「名誉」と「先入見」概念は、個別に取り上げられるか、ほかの重要な概念「徳」(virtue)「習俗」(manners)などとの連関で捉えられることがほとんどであった。そのため「名誉」と「先入見」を連関の中で扱うことそれ自体が、独自性を持っているのである。

第 2 に、「名誉」と「先入見」の関係を、インド問題にまで射程を広げて解釈しようと試みたことである。そもそも、バーク研究史において、インド問題は等閑視され続けてきた。それは、資料が膨大なためと、あまりに政治的な問題だからである。政治的発言はレトリック表現が多く、思想の分析には適さないように思われ、いままであまり研究されてこなかった。しかし、近年、バークのインド問題を扱う研究も増え、バーク研究における未開拓の地であると注目を集めるようになってきた。インド問題においてたびたび注目されてきたのは、バークがインド社会をヨーロッパと伍するものと認識している点である。これまで多くの研究ではインドを高く評価しているのは、政治的レトリックか、カースト制を理想化しているからだとされてきた。つまり、なぜゆえ、バークがインドのカースト制を高く評価したのか、ということについて説明していないものが管見のかぎりほとんどであった。以上のことから「名誉」と「先入見」という概念によってバークのインド問題を見た点は、インドをなぜゆえ評価したのか、という問題について一定の寄与をなし、本研究の独自性といえる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)